

氏 名	かわ 川 村 かく 覚 しょう 昭
学位(専攻分野)	博 士 (教 育 学)
学 位 記 番 号	論 教 博 第 102 号
学位授与の日付	平 成 15 年 3 月 24 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 2 項 該 当
学 位 論 文 題 目	教育の根源的論理の探究——教育学研究序説——

論文調査委員	(主 査) 教 授 山 崎 高 哉	教 授 矢 野 智 司	助教授 鈴 木 晶 子
--------	----------------------	-------------	-------------

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、教育の最も根本的な問題は人間を「人間らしい人間 (homo humanus)」にすることであり、それ故に、教育学の研究の課題は人間を「人間らしい人間」にする「善き教育」の論理を探究することにあるとして、教育の根源的論理の探究を試みたものである。本論文は「序」と3章8節から成る本論、並びに「おわりに」によって構成されている。

「序」において、論者は、我が国の教育は明治以降の近代化の中で西欧近代の教育学に学び、これを摂取してきたが、現代日本の荒廃した教育の現実には照らし、近代教育学は今日の教育問題を解決するにふさわしい論理になっておらず、それ故に、近代教育学に内在する根本問題を抉り出し、これを根源から脱構築しなければならないと主張する。そして論者は、その脱構築に際し、「近代的思惟」に代わるべき新たな思惟として「臨床教育人間学的思惟」を提唱し、近代的思惟から臨床教育人間学的思惟へと研究方法を転換することが「より人間に即した教育」の論理を構成する教育学研究になると強調する。

第1章「教育学研究の視座」は第1節「生の背理性と教育の意味」と第2節「近代教育学の脱構築の地平」から成る。第1節では、論者はまず、教育が人間形成である以上、教育学研究は教育理解とともに、人間理解を不可欠とするが、近代教育学に依拠する今日の教育現実が「教育荒廃」現象を招いている遠因に、人間の本質を善と見、その生の背理的矛盾性を十分に把握していない人間理解があることを指摘する。そして、論者は、このような人間理解は人間を「主語的基体 (subjectum)」と見なし、その自己確立をより強固に推し進める「表象的思惟 (das vorstellende Denken)」から生み出されるとする。なぜなら、この思惟の特徴は、表象する人間が対象の選択と確保を自己の内で行う主観の自己展開にあり、その限りで、表象する人間は自己を真理の主体として、その核心を善なるものと確信するからである。次に、論者は、この表象的思惟が一切の現象を数学的に法則化でき、予め計算された計画に基づき、人間を合理的に形成できるという「数学的精神」を近代人の意識のなかに定着させたと説く。このような人間の性善説と数学的精神を自明の前提とした近代教育学はその普遍妥当性と科学性を確立することを目指し、それ故に人間における悪の本質や実存的側面を忘れ、生きた教育の現実に対応できなくなっている。論者は、この現代教育の根本問題を解決する方途として、近代教育学が拠って立つ自明性と閉じた体系を問いに付し、近代教育学の脱構築の必要性を主張するのである。

第2節では、近代教育学を脱構築するために、ハイデッガーの解釈学的現象学で明らかにされた「有 (Sein) の地平」から構成される「有論の人間学」の視点の必要性が論じられる。ハイデッガーの「有の地平」に定位して考えるとは、近代的思惟が「有るもの (Seien des)」にかかわる思惟であって、「有るものが有る (das Sein des Seiendes)」の「有」にかかわる思惟ではないのに対し、「如何なる有るものをも、そしてまた有るもののもち得る有るものとしての如何なる規定性をも、超越して存する」「有から呼び求められる思索」を行うということである。その思索では、人間の存在と生成にとって根本条件である実存的なものや超越的なもの—それらは予め計算し予測できるものを中心に扱ってきた近代教育学によって忘却されていたもの—を考察の対象とすることができる。論者は、このような思索に相応する教育現象として教師と生徒との「出会い (Begegnung)」を例に挙げて詳論している。

第2章「教育学研究の問題構制」は第1節「近代的自由意識と仏教的教育観」と第2節「意志の自律と悪の問題」から成

っている。第1節で、論者は、近代教育学が人間形成の最も中心的な目的としている人間の自由の確立と拡大が西欧近代で成立する背景にキリスト教神学思想があることを明らかにするとともに、西洋的な神概念がない日本においては自己の絶対性の自己主張を招く問題性を指摘し、我が国の現代の教育現実に照らして日本人の精神生活の根底となっている「仏教的無」の考え方—自己の内に常に否定的作用を見る形成観—が教育の論理構成に不可欠であると力説している。

第2節では、論者は、仏教的視点が教育学研究にとって重要であることを示すために、西洋の近代思想、特にカントの哲学において中心的位置を占めている「(意志の)自律」の先天的原理が内在的に抱えている問題を人間悪との関係で明らかにしている。論者によれば、カントの意志(実践理性)の因果性のうちには絶対的な善が求められ、自律の法則に従う限り、意志は絶対に善であるとする立場には仏教で言う「法執」の姿態、すなわち「高次の我執」が含まれ、そこに「悪」の要素を見なければならないという。

第3章「教育学研究の根本課題」は第1節「現代教育の根本問題と教育学の課題」、第2節「『より人間に即した教育』の思惟—臨床教育人間学的思惟へ」、第3節「教育学の根本課題としての宗教教育」、第4節「現代に於ける多文化社会の教育課題」から成っている。第1節で、論者は、現代教育の根本問題を、西欧近代で確立された「主語的基体」の定着を目指し、全体より個を重視した戦後の教育改革に中心を置いて明らかにし、第2節では、教育の根源的論理の探究に必要な学的方法として、主観と客観を分離して世界を見る二項対立的な近代的思惟に代わって、むしろその二項対立の起こる以前、主客分離以前の「世界内存在(In-der-Welt-sein)」から人間存在を考える「臨床教育人間学的思惟」が求められることを説き、このような日常的な生活世界における対象化し得ないものに即した思惟が「より人間に即した思惟」であり、この思惟が最も具体的に現れているのが浄土教の論理に立つ親鸞の超越的な立場であることを明らかにしている。

第3節では、論者は、「超越」の問題を宗教教育との関係で論じ、宗教が教育学の理論構築の本質的問題にならないことを主張している。第4節では、現代日本の国際化とともに重要な教育問題となっている異文化教育と多文化主義が論じられ、近代教育学に見られる文化一元論的な見方を克服するためにも、日常的な生活世界の基層を構成している基層文化が人間形成において極めて重要な意味をもつことを強調している。

「おわりに」において、論者は、今日、教育が人間生活の根本問題になっているが、教育が人間形成において十全な機能を果たせないとすれば、その教育を支えている教育学理論そのものに欠陥があり、その欠陥を炙り出し、従来の教育学理論に対抗できる論理を探究することが本論文の課題であったことを表明している。

論文審査の結果の要旨

1960年代以降、日本の教育(哲)学において、そのパラダイムの転換を図ろうとする試みが相次いで現れ始め、また1980年代、とりわけ1990年代に入って外国における伝統的な教育(哲)学批判や「ポストモダン」論議の紹介が盛んになるとともに、教育(哲)学における新しい問題設定を唱えるさまざまな著書・論文が発表されている。さらに、西欧近代で発達した「近代教育学」に拠って立つ現代日本の教育現実において「教育の荒廃」現象が深刻の度合いを加えるにつれ、そのような教育問題を生み出した歴史的要因の一つに近代教育学の論理構成があるのではないかという言説が勢いを増している。論者は、このような思潮を受けて、近代教育学に内在する問題点を炙り出し、近代教育学を根源から脱構築するために、教育学研究の方法的視座を問い直そうと試みている。すなわち、その第一は、デカルトのコギト(cogito)のように、思惟することの自己確信性に基づく人間の主体の確立を推し進めた近代的思惟の基本的構造が「表象的思惟」にあり、この思惟が近代教育学においては教育学の普遍妥当性と科学性の確立として現れ、それが今日の生きた教育の現実に対応できなくなっていることを明らかにすることである。第二は、表象的思惟が人間存在を善と見る性善説と一切の現象を数学的に法則化できるという数学的精神を近代人の意識のなかに定着させ、人間の生の背理性を忘却させている点に鑑み、この表象に基づいて自明化されている近代知の閉じた体系を打ち破るためには、ハイデッガーの言う「有の地平」に注目しなければならないということである。第三は、「有の地平」に定位して教育学研究を展開する時、日本人の精神生活の根底となっている「仏教的無」の考え方、つまり無に媒介された否定的作用を自己のうちに見る教育観が教育の論理の基軸とならなければならないということである。これら三つの教育学研究の方法的視座は、一つ一つについて見れば、必ずしも新しいものではないが、三つの視座を連関・交差させて近代教育学の脱構築を図ろうとする壮大な構想の下に、思惟の枠組みの変更、すなわち主観

—客観という二項対立的な枠組みで人間と世界を見る近代的思惟に代わって、むしろその二項対立の起こる以前、主客分離以前の枠組みから人間と世界を考える「臨床教育人間学的思惟」に基づき「より人間に即した教育」の論理を構築しようとした点に、本論文の第一の学問的価値があると言える。

本論文の第二の学問的価値は、従来の教育学では触れられることの少なかった人間の悪や超越の問題が人間形成において、また新たな教育の論理の構築において極めて重要な意味をもつことを明らかにした点にある。論者は、まず、近代教育学においては、人間の本質をただ善としてのみ捉え、悪の問題を教育の視野のなかに入れていなかったが、今日の教育に求められるのは単に善の理念と数学的精神によって構成された知識や技能を合理的に習得させるという「有るものの地平」に止まるのではなく、それを越えた「有の地平」へと人間を向け変え、人間の本質とそこから生起する「善即悪」「善悪共存」の有的な世界の本質を自覚させることにあると主張する。次に、論者は、近代教育学が依拠する近代的思惟、つまり表象的思惟においては、人間形成の理念は人間の自由の確立と拡大に求められるが、この自由の意識は人間の自己神化の問題と深くかかわっており、自己の絶対化をもたらし危険を伴うと指摘する。このような過剰な自由意識が今日の子どもの問題行動の根底に認められるとすれば、論者は、それとは反対の、自己の有限性と「負い目（良心の痛み）」を自覚する人間らしい人間を形成するために、親と子、教師と生徒との関係を否定的に越えた「共に有る同朋同行」としての出会いが成立しなければならないと説く。論者の仏教的視点、超越的視点に基づく教育学の理論構築への問題提起は同時に学校教育において、人間の生の背理性に注目して悪や超越の問題を考え、人間存在の全体を視野に入れる宗教教育の必要性を強調するまでに及んでいる。論者の仏教者としての立場が明瞭に出ている本論文の特色の一つとして指摘しておきたい。

本論文の第三の学問的価値は、日本における日常的な生活世界及び精神世界の基層を構成している「基層文化」に注目し、今日及び今後の教育をより人間に即したものに転換していく具体的な道筋を提言していることにある。論者によれば、基層文化は長い時間をかけて歴史的に培われて生活世界の基層を成し、世代から世代へと伝達されてきたものである。それ故に、基層文化は文化共同体としての社会を構成する実質的な内容と形式の母胎として、そこに生活する人々の自然な共通の精神的陶冶財となり、教育と不可分の関係に立っている。その意味で、それは人間の生き方を生み出す土台であり、人間が人間になるために必要な筋道や基準を提起するものとなる。ところが、今日、このような基層文化が子どもの前から隠蔽され、基層文化に配慮しない教育が行われている。論者は、日本の基層文化を仏教に見いだし、「無相の自己」の実現を求めて自己中心的な「愛執」の心を清浄にしようとする「心清浄道」こそ人間の良心を目覚まし、「心の教育」に寄与するのみならず、日本人としての文化的アイデンティティを形成するとともに、自文化と異文化の差異性を認め、近代教育学に見られる文化一元論的な見方を克服し、文化的多元性の承認を目指す多文化教育にも重要な役割を果たすであろうと論じている。

本論文は、以上のように、学問的に高く評価できる点があるのではあるが、問題点もないわけではない。一つは、近代教育学を脱構築するための教育学研究の三つの方法的視座を定立する際に、先行研究との異同をより明確に際立たせることが必要であり、論者の立場の独自性をより鮮明にするためにも惜しまれる。また、戦後教育に対する批判が戦後直後の教育改革の理念的方向に限られ、当時輩出した創造的な教育実践についての考察に欠け、批判の公正さを損なっている感が拭えない。さらに、仏典からの引用が多く、仏教関係者以外の理解を得るための配慮と工夫があっても良かったのではないかとと思われる。

もちろん、これらの問題点は、論者のさらなる研究の進展によって解決され得るものであり、近代教育学の脱構築という大きな課題と真正面から取り組み、教育学的思惟の転換の一つの方向を指し示した本論文の価値を減じるものではない。

よって、本論文は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。

また、平成14年12月26日、論文内容とそれに関連した試問を行った結果、合格と認めた。